

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 94 号

平成 22 年 2 月 20 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 045-お 912-1960

ヒルティ

「眠られぬ夜のために 第二部」

（草間平作・大和邦太郎訳・岩波文庫）より（9）

4 月 12 日

どんな善き衝動にもただちに従うという習慣は、樂園にいたる一番の近道である。

4 月 20 日

この世におけるただ一切の善事だけを報道して、悪だの、くだらぬ事柄には見むきもしないというような新聞なり、評論誌なりを、われわれは持つべきであろう。それを読めば、この世には一体どれほど多くの善事がなされており、特に最初は邪悪だったものが善に転じたり、善に仕えるようになるものがどれほど多いかも、はじめて分るであろう。「神は、神を愛する者たちとともに働いて、万事を益となるようにして下さる」（ローマ人への手紙 8 の 28）。これこそ、正当な、しかも長持ちする楽観主義（オプティミズム）である。このようなことを、われわれは生涯において、それが単なる「偶然」とのみは思われぬほど、たびたび経験するものである。

4月24日

どうしたら聖霊が与える能力(ガーベ)を、また原始キリスト教時代に見られたような霊的能力を、手に入れる(それとも「願い求める」と言った方が適切かもしれない)ことができるだろうか。それは、だれもあなたに伝えることはできない。そういう能力はまさしく賜物(ガーベ)なのである。もしあなたが、それをもって人に自慢したり、世間の評判をわかせたいとか、新たな改宗時代を招きよせたり、あるいは、ただ「小さい集まり」の中で人に尊敬され驚嘆されたいとかいうつもりならば、あなたはその能力を確実に手に入れることも、長く持ちつづけることもできないであろう。だが、あなたが、あらゆるこの世の事からできるだけ汚されない住居(すまい)をそのために用意すれば、聖霊の能力は最も確実に、そこに入ってくるであろう。けれどもあなたはまた、昔から実に多くの善良な誠実なキリスト者たちが、たしかにこれらの能力を持っていなかったこと、おそらくその存在や可能性をも全く信じていなかったことを、よく心にとめるがよい。そればかりか、聖霊の授ける能力を持っていると自惚(うぬぼ)れる者や、そのことについて沈黙を守り控えめにしようとしないう者や、はなはだしいのは、それで金儲けを企てる者は、悲しむべき結末を予期しなければならない。

5月3日

このような愛、あるいはそれを友愛と呼びたいが、本当にこの愛の能力を持っていることを実証する人がどんなに少ないかを、あなたはなお生きている間に、経験するであろう。それでもあなたはその事に驚いて、愛をすててはならない。なんと言っても、愛は、神のそば近くにあることに次いで、地上における最善のものである。

5月8日

あなた方によく言うておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。(ヨハネ 25・40)

善人はよい倉から良い物を取り出し、悪人は悪い倉から悪い物を取り出す。(マタイ 12・35)

われわれはキリスト教をもって日常生活のささいな事柄にどのように対処し、それにうち勝って行くべきであろうか。このように、誠実な多くの人びとが自問するのもまんざら理由のないわけではない。だが、その点にちょうど彼らのキリスト教信仰の程度と内容とが現れている。もし彼らのキリスト教がただ学んで得たものか、また人生の大事件のために役立てようと受け入れたものにすぎないならば、小事においては、人間の自然のままの「本性」がその「権利」を主張するのは当然である。ところが、小さな事柄はずっとひんぱんに起るものだ。もしそのキリスト教が完全にキリストの考えた通りのものであれば、このような大小の区別はもはや存在せず、小事にも大事にも同じ精神が示されるであろう。(ヨハネによる福音書 25・40) しかし本当にそうなるまでには、人生においてかなり長い期間が必要である。それはとにかく、怒りっぽい、気むずかしい、心の狭い、貪欲な、あるいは、富や身分に執着するキリスト者というものは、決して見よい図ではない、最も「この世の君」にとっては、別であろうが。というのは、サタンは、そういう人間の場合、それらの「いやしい性質」につけ入って、彼らを抑える見込みがあるからだ。(マタイによる福音書 12 の 35)

5月10日

あなたのみ言葉は力強く、
精神と魂へしみとおる。
あなたのくびきは快く、み霊の導きは確かであり、
はや天国の門が開かれている。

(同胞教会讃美歌973番)

もしひとが、まことの善への正しい指導者になりたいと思うならば、まさにこの歌のように人々を導かねばならない。そして相手の心の中の嵐や燃える火をあまりに早く静めようとしないので、心の堅い殻を溶かすのに必要なだけの時間を、相手に与えねばならない。その上で、適当な時に適当な言葉をおだやかな声で語ること、これが教育の秘訣である。しかしこれを会得した教育家や牧師は、いつの世にもわずかしかないし、それにこの秘訣は、「学問の体系」のなかに編みこむことができない。それを会得するには、自分のあまたの人生経験とある種の心理学とが必要である、もっともそれは、大学などで教える普通の心理学ではないが。

5月12日

健康な、こころよい、十分な睡眠をとるように心がけなさい。これはたしかに、だれにでもできるわけではない。だが、なんといつでも、これは最良の神経鎮静剤であり、心の興奮に対してもいちじるしい機能がある。よい眠りのあとでは、ものごとが全く違って見え、前の晩には、まるで行く手をはばむ巨人のように思われた難事をも、笑いたくなるものである。そればかりでなく、われわれ自身がそれを望むならば、体についての不断の気づかいもない健康状態を保って、善人ばかりとの交わりのうちに、これからの全生涯を送ることもできる、こう想像すれば、これ以外になお別のものを求めるのは愚かだと自分を叱り、世間の人々がひどく熱心に努力し、追及するものの大部分を、全くばかげた事として棄て去ってしまうだろう。...

5月13日

人を生かすものは霊であって、肉はなんの役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、また命である。

(ヨハネ 6・63)

数ある書物の中で福音書にまさるものを、あなたは見出さないだろう。なにかよい本を探し求めるとこの段階を、あなたは省いても良いのである。だが、キリストの言葉をどのような仕方か、すなわち、そのような人生観や世界観に対する愛好心をもって読むか、あるいは歴史的还是しくは哲学的批判をもって読むか、あるいは機械的に規則正しいやり方でか、それとも深い反省もなくただ言葉のうわべだけを追うのか、その読み方しだいでキリストの言葉はあなたに全く違ったものに見えてくるだろう。それらの言葉は、まさに彼自身が語ったように、全く「霊でありまた命である」(ヨハネによる福音書6の63)。こう言ったからといって、あなたはほかのものを讀んではならないというのではない。それどころか、あなたが教養ある人になりたければ、むしろ読まねばならない。しかし、あなたをキリストの言葉から他にそらすものは、正しいものとはいえない。あなたは、それらをただ教養のための材料として用いることができるにすぎない。

宗教的内容を持つ実にたくさんの書物(その中に教父たちやスコラ学者のものをも含めて)については、次のように言ってよい、これらの書物は真の意味で「信仰を高める」ようにはたらくよりも、むしろはるかに精神に重荷を負わせ、昏迷にみちびくように作用する、と。あなたが神学を研究するのでなければ、それらをことごとく読んでしまう必要はない。それぞれの種類からその見本を1冊でも読めばたくさんであろう。私自身は、それらの多くの本で、ずいぶん苦勞をした。もしも私が、たやすく他人の説に感服させられないだけの良識を持ち合わせていなかったら、精神的危険に満ちたこのジャングルを、無事に通り抜けられなかったであろう。

5月14日

まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて添えて与えられるであろう。だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことはあす自身が思いわずらうであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。(マタイ 6・33 - 34)
主はこう言われる、「おおよそ人を頼みとし肉なる者を自分の腕とし、その心が主を離れている人は、のろわれる。彼は荒野に育つ小さい木のように、何も良いことの来るのを見ない。荒野の、干上がった所に住み、人の住まない塩地にいる。おおよそ、主にたより、主を頼みとする人はさいわいである。(エレミヤ書 17・5 - 7)

マタイによる福音書 6 の 33・34 のために。

ひとは過ぎ去ったことをもはやかれこれ考えず、また同じように将来のためにあまり取越し苦勞しない習慣を一旦養ったならば、時間の点でも、心の安らぎの点でも、実にうるところが多いであろう。

しかしそのためには、われわれのことを心にかけている誠実な神を持つことが肝要である。そうでなければ、ことに心配のない生活などは不可能であり、それこそまさに軽率というものだ。神に対する澆刺たる愛と結びついて、はじめて不安のない生活ができるのであって、すでに多くの人がこの生涯でこのことを経験している。私自身にとっては、以前私の心配のたねになった多くの苦難が、それによってまったくとり除かれるか、それともずっと耐えやすいものとなった。また私の生涯におけるすべての善は、私が予期しないのに不意にやってきた。たいていの場合、私はそれに対して十分な用意をしていなかった。というのは、神が私に対して抱いている道に添わないような計画に、私は多くの時間を浪費していたからである。人間を頼りとすることは常に危険である。しかもそれらの人が身分あり、高い地位にあればあるほど、ますますそうである。エレミヤ書 17 の 5 - 9。

5月16日

人々が巡礼することになっている聖地は、そこにだれかがなにか信仰上の強い感銘を受けた場所とか、さらに神の召しを受けた場所である。そういう場所は必ずしも教会とはかぎらない。同じようにしばしば家の中の部屋や野や森や山の上でさえもある。そこで、このような所である人が神に接するということは、元来つねに個人的なものであるのに、そのような場所が多くの人たちにもはっきりした効験をあらわすように思われると、後世の人々は、そこにひとつの教会堂を建てたりするが、その場所はもとより神の霊を縛りつける力などあるわけがない。あるいはまた、このように神へ接近した人の抜け殻(その人の遺骸)の上に教会堂を造ったりするが、あたかもそれは、脱ぎすてられた生前の衣服と同じく、神の接近とはなんのかかわりもない。何かを尊崇したいという要求は、たしかに人間の本性にそなわっている。しかし、偶像を拝することは、真の敬神よりもはるかに容易である。なぜなら、真の敬神とはある精神的内容を把握して、それに倣おうとして積極的に努力することだからである。従って、崇拝者たちはほかにもっと自分に都合のよい崇拝の対象を発見するとか、それとも、崇拝される者が彼らに十分な感化力を持たない場合には、彼らはたやすく背強者や叛逆者になりかねない。すべての宗教の創始者は、ほどよく早目に世を去らなかつた場合、つねにそのような目にあつてきた。

5月17日

もしあなたが、一度神の接近を経験したなら、その感銘は終生忘れることができないだろう。けれどもそれは、祈りによっても、儀式によっても、または断食やそれに類する方法によっても、招き寄せることはできない。むしろそれは、求めずして突然に、さながら旧約聖書の天使のように、訪れてくるのであう。たしかにそれに似た幻像（まぼろし）もあって、これは求めて得ることができる。しかし、こういうものは恍惚状態にある聖者たちの神経を錯乱させたりするが、これに反して真の神の接近は、この上ない健康の実感と来世の存在の前味とをあとに残すのである。さらに、それはつねに神のなにかの告知であるか、委託か命令であって、にせ物の場合のように、単に享樂などでは決してない。だが、現代人はこれについて何を知っているのだろうか！

5月25日

わたしの知っているキリスト教の教理（使徒、教父、中世の神の探求者、宗教改革者、その後の説教者とか哲学的著述家などの）の中で、わたしはキリスト自身の教えを特別によく理解した。そしてキリストの教えが、ただそれだけが、真実の、それだけが信頼するに足るキリスト教であると信じている。われわれは、どんな教会中心の思想よりも、この教えを固く守ることが最善の道である。わたしは自分の全生涯をかえりみて、全くただこの一点に価値を置くものである。

5月27日

キリスト教の人生観と結びつくすべての幸福を、前もって知ることができるなら、世の人びとはこぞってこの教えに集まってくるだろう。彼らが歩む道では、それに似たものはなにも見つからないからだ。そしてまた、この世俗の道で出会うであろうあらゆる困難が、ただちに最初からひとまとめに予見できたら、だれ一人その道を踏むものはないだろうに。

5月29日

われわれが会うそれぞれの人のために、われわれは何かしてやったり、言ったり、考えたりする責任がある。

次のようなことをためてみなさい、世間の人たちは、それをお上品と考えるからか、出会う人に対して、親しみの眼ざしを向けもせず、冷淡に、そればかりか軽蔑をもってやり過ごすことさえあるが、あなたはそうしないで、もしあなたがなにも言ったり行ったりできにくい場合は、少なくともその際なにか善いことや親切なことを考えてやるがよい。しかしこのような場合は大変多いものであり、それがまたあなたの内的進歩のためのよい機会ともなるだろう。なぜなら、人びとはしばしばわれわれにつかわされた使者であり、神が通例用いられる不断の郵便配達人であるからだ。だが、いうまでもなく、神に反する霊の使者であることもある。

ところで、あなた自身は人びとに対して、どちらの霊の使者であり、郵便配達人であろうか。これこそ、大切な問題である。

6月1日

あなたが教えることを実行するように努めなさい。

若い時代には学ぶこと、教えることがむしろその本領であるが、とくに年齢がすすめば、実行ということがはっきり外に現われて来なければならない。やがてそれぞれの人になんらかの善き、真実な思想の生きた表現となっていなければならない。そうでなければその人は無意味に生きてきたことになる。

6月7日

だから、わたしは落胆しない。たといわたしたちの外なる人が滅びても、内なる人は日ごとに新しくされていく。(コリント 4・16) しかし感謝すべきことには、神はわたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちに勝利を賜ったのである。(コリント 15・57) キリストのためのあかしが、あなたがたのうちに確かなものとされ、こうして、あなたがたは恵みの賜物にいささかも欠けることがなく、わたしたちの主イエス・キリストの現れるのを待ち望んでいる。主もまた、あなたがたを最後まで堅くささえて、わたしたちの主イエス・キリストの日に、責められるところのない者にして下さるであろう。神は真実なかたである。あなたがたは神によって召され、御子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに、はいらせていただいたのである。(コリント 1・6 - 9)

十字架の言葉は、滅び行くものには愚かであるが、救いにあずかるわたしたちには、神の力である。(コリント 1・18)

また、あなた方の肢体を不義の武器として罪にささげてはならない。むしろ、死人の中から生かされたものとして、自分自身を神にささげ、自分の肢体を義の武器として神にささげるがよい。(ロマ 6・13) なぜなら、聖書はなんとやっているか、「アブラハムは神を信じた。それによって、彼は義と認められた。」とある。(ロマ 4・3)

コリント人への第2の手紙4の16、コリント人への第一の手紙15の17、1の6 - 9,18、ローマ人への手紙6の12 - 14、4の3。

今やあなたは、この使徒パウロが彼の教団に宛てた手紙を読んで、それがあなたに役立つほどすでに進歩をとげている。以前、初歩の段階にあったときは必ずしもそうではなかった。このように、すべての言葉がどんな時期にも同じように適するというものではない。それがとりもなおさずキリストの言葉の特質である。(マタイによる福音書7の29)